

すみよし



2020年 クリスマス号 第209号

目次

☆ 聖句	Y.A.	・・・	1
☆ 巻頭言	コンスルタ神父	・・・	2-3
☆ 待降節 黙想のヒント	赤波江神父	・・・	4-7
☆ 私にとって今年のクリスマスが特別である理由		・・・	8-9
☆ 司祭からのメッセージ		・・・	10
☆ 住吉教会 2020		・・・	11-20
☆ 各チーム活動報告		・・・	21-26
☆ 図書紹介		・・・	27
☆ 信徒動静		・・・	(28)
☆ 教会日誌		・・・	29
☆ 後記		・・・	30

題字 J.Y.

「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。
左記 QR コードからのアクセスもご利用下さい。



聖句

主よ、あなたは従う人を祝福し
御旨のままに、盾となってお守りくださいます。

詩編 5章13節

主よ、あなたはわたしの灯を輝かし
神よ、あなたはわたしの闇を照らしてくださる。

詩編 18章29節

選：マリア・クリスティーナ
A.Y.



CELEBRATING CHRISTMAS IN THE MIDST OF CORONAVIRUS PANDEMIC



Fr. Constancio Consulta

There are numerous people who are apprehensive whether we will even be able to celebrate Christmas this year. Since the current calendar year has been marked by a catastrophic pandemic, we are living through a period of deep disruption, disconnection, alienation, and a lot of pain, fear and anxiety. It is so devastating as many lives of dear ones have been lost, and still being lost every day. The people and other things we hold most dear have been separated from us and the normal order of life has been utterly upended/overtaken. And, our hearts are bursting with a most hopeful anticipation of a new and better future. People seek and grab any glimmer of hope just to be out of this present situation brought about by coronavirus pandemic.

This year we may miss out on many festivities we have been used to, but this does not change the true meaning of Christmas, which is, Jesus has come to earth to bring salvation to all of mankind. The main point of Christmas, the reason why all creation will rejoice on that day, is not that another cute little baby is born but that God is with us. We will see this baby with our physical eyes, but we can only see the presence of God with the eyes of faith.

When we enter the season of Advent, it gives us the opportunity to begin anew and to enter a deeper place of interior awareness. We not only continue to await the second coming of the Lord, but we look forward to celebrating again the birth of the Babe in Bethlehem over 2,000 years ago. More importantly we are preparing ourselves to receive him more deeply into our hearts every day. Christ came and redeemed us totally. This is a gracious gift; and to receive this we have to open our hearts to the light of Christ. Three voices lead us on the way through Advent: Mary, John the Baptist, and the prophet Isaiah.

On December 8, we joyfully celebrate the Solemnity of the Immaculate Conception. This feast not only tells us that Mary was free from sin from the moment of her conception, but it gives us hope for our own 'new birth' and our victory over the powers of darkness. John is the great herald who proclaims that the coming of the Messiah is close by. He teaches us that the way to make ready the way of the Lord is through humility, acknowledging God as God and ourselves as his creatures. The prophet Isaiah, whose words we read through much of Advent, is the hopeful prophet who describes the Messianic kingdom. The Messiah who is a descendant of David, will bring light into our darkness and peace and justice into the world. His words help us to walk through Advent with hope and expectation.

As we navigate this pandemic, may we remember the absolute tenderness and perpetual closeness of God. In all chaos and fear, God is always close enough that we can hear the divine whisper in our hearts. The coming Christ-Child is our consolation and hope! The people that walk in darkness have seen a great light. Merry Christmas to one and all.





コロナウイルス感染症の世界的流行の最中に祝うクリスマス

コンスタンシオ・コンサルタ神父

今年のクリスマスをお祝いすることができるのだろうか、と多くの人が懸念しています。感染症の悲惨な大流行がこの一年の暦に出現して以来、私たちは深い混乱、分断、疎外、そして多くの痛み、恐怖、不安の中を生きてきました。悲しいことに多くの愛する人たちの命が失われ、そして今も毎日のように失われています。人々や私たちにとって大切なものは私たちから遠ざけられ、通常的生活様式は完全にひっくり返されました。そして、私たちの心は新しい、より良い未来への希望に満ちた期待に満ちあふれています。皆、コロナウイルス感染症によってもたらされた現状からただ逃れようと、微かな希望を探し求めています。

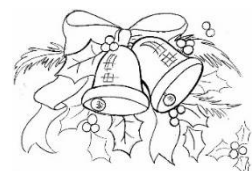
今年、私たちは慣れ親しんできた多くの祝日をお祝いする機会を逃しましたが、このことはイエス様が人類の救いのために地上にいられたというクリスマスの真の意味を変えるものではありません。クリスマスの肝心の点は、すべての創造物がその日を喜び祝う理由がただ一人の可愛い赤ちゃんが生まれたからではなく、神が私たちと共にいられるということです。私たちはこの赤ちゃんを身体的な目で見ることでしょう。しかし私たちの信仰の目をもってのみ神の存在を確信することができるのです。

待降節は私たちにあらためて、より深い内面を自覚する機会を与えてくれます。私たちは二度目の主の到来をただ待ち続けるのではなく、2000年以上前のベツレヘムでの赤ちゃんの誕生を再び祝うことを心待ちにするのです。さらに重要なことは、幼児を私たちの心のより深いところに受け入れる準備を日々怠らないことです。キリストは私たちの完全なる贖いのために来られました。これは恵みあふれる贈り物です。そしてこれをいただくため、私たちの心をキリストの光へと開かなくてはなりません。三人の代弁者達、聖母マリア、洗者ヨハネ、預言者イザヤが待降節に私たちを導いて下さいます。

12月8日は無原罪の御宿りを喜びのうちに祝う日です。この祝日はマリア様が受胎の瞬間に罪から解放されたことを私たちに告げるだけではなく、私たちの「新たな誕生」と闇の力に打ち勝つ力の希望を与えてくれるのです。ヨハネはメシアの到来が近いと宣言した偉大な先駆者です。彼は主の道を備えるのは謙虚さを通してであり、神を神として、そして私たちを神の創造物として認識することであると私たちに教えます。待降節に多く読まれる預言者イザヤの言葉は、メシアの王国についての希望に満ちた預言です。ダビデの子孫であるメシアは私たちの闇に光を、そして世界に平和と正義をもたらすでしょう。彼の言葉は待降節を過ごす私たちに希望と期待を与えてくれるのです。

このパンデミックの中を生きる私たちが神の絶対的な優しさ、そして神がいつも私たちに寄り添って下さることを忘れませんように。あらゆる混乱と怖れの中で、私たちが神のささやきを心に聞くことができるように、神はいつも近くにいて下さいます。地上にいられる幼児キリストが私たちの慰めと希望なのです。闇路を行く人々は偉大な光を見ました。みなさん、クリスマスおめでとうございます。

(編集部訳)



《 待降節黙想のヒント 》

例年、待降節に行われる黙想会は、今年はコロナの影響で中止となりました。毎週赤波江神父が、教会連絡網を通じて送ってくださる「待降節黙想のヒント」で、黙想し、思い巡らし、祈り、クリスマスを迎える準備をしました。

待降節第1主日 11月29日

「目を覚ましていなさい」(マルコ 13:33-37)

今日の福音の中でイエスは3度「目を覚ましていなさい」と言われました。ところで皆さん、「まさか」「予期せぬ」「想定外」などの言葉を聞くとどのようなことを連想されますか。恐らく、何か良くないことマイナスなことを連想される方が多いのではないかと思います。



「まさかと思った事故」「友人の予期せぬ死」「想定外の災害」など。どうも私たちは物事をマイナスに捉える傾向があるようです。でも神との関係ではそうであってはなりません。「まさかと思ったお恵み」「予期せぬ人との出会い」「想定外の幸運」というふうに捉えましょう。

ビジネスチャンスという言葉がありますね。社会では何か困った問題が起こると人は必ずそこにビジネスチャンスを見つけます。例えばスズメバチの大量発生、ゴミ屋敷や空き家の問題が生じるとそれを解決する会社を立ち上げて利益と雇用を生み出します。

それなら私たちも人生の困難に直面したとき、そこに人生を生きるためのチャンスを見出しましょう。だいたい一人の人間が一生の間に経験できることはほんの僅かです。その僅かな経験の中でものごとを判断するわけで、普通自分の思い通りに事が運ぶことを成功と呼び、思わぬ方向に事が展開することを失敗と呼びます。そして計画が想定外の方向にそれてしまったら、人生思うようにならないと肩を落としたりします。でも「人生思うようにならない」という言い方は、「人生思わぬところに道がある」という意味でもあるのですね。受験の失敗、不本意な人事異動などで、自分が本来望まなかった道に進まざるを得なくなり仕方なしに他の道に進んだとき、ああこんな道もあったのだと気づいて、かえって興味や関心がわいて充実して生きている人たちが無数にいます。興味があるからやるもよし、でもやってるうちに興味がわくということも事実なのですね。従って失敗は新しい発見なのですね。この失敗の中に想定外の発見と、人生を生きるチャンスを見出すために、皆さんしっかりと目を覚ましていきましょう。

(赤波江神父)

待降節第2主日 12月6日

「私たちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、
神の約束に従って待ち望んでいるのです」(使徒ペトロの第二の手紙3:13)

聖書の中には「滅びる」という言葉が時々見られます。今日のペトロの手紙でも「全てのものは滅び去る」という言葉が出てきました。でも何のために滅び去るのでしょうか。用事が済んだから滅び去るのでしょうか。
そうではありません。新しいものが生まれるために古いものは去らなければならないのですね。ですから聖書の視点はいつも新しさ、誕生なのですね。時は過ぎ去る、それは新しいものが生まれるためにこそ古い時は過ぎ去らなければならないということなのですね。

毎年4月頃桜の花は私たちを楽しませてくれます。やがて花が終わった後は葉が出て半年近く桜の木は緑の葉で繁っています。やがて秋が深まると葉は散ってしまいます。どうして葉は散るのでしょうか。寒くなって枯れるだけなのでしょう。いいえ、そうではありません。桜の葉は来年花を咲かせるために準備してその使命を終えて散るわけで、つまり命を譲り渡すのですね。しかもわずかに2週間の桜の花のために葉は半年間も太陽の光を受けながら準備するわけですね。

人間も同じでなぜ死ぬのかというと、年を取ったからではなく次の世代のために命を譲り渡すためなのですね。このようにして人の命は有史以来延々と受け継がれてきました。人の誕生は大切なこと、同じように人が死ぬことも大切なこと、しかもよりよく死ぬことはもっと大切なことです。ですから人が亡くなったときの儀式は一般に葬式といわれますが、正しい意味では「命の伝達式」でなければならないのですね。しかもそれで終わりではなく、亡くなった後は記憶として残された人の人生の道案内にならなければならないのですね。

そろそろ人生のマラソンのラストスパートに来ている人も多いと思います。しっかりと次の世代にバトンタッチしましょう。

(赤波江神父)



待降節第3主日 12月13日

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそキリスト・イエスにおいて神があなたがたに望んでおられることです。」
(テサロニケの教会への第2の手紙5:16-17)

パウロが他のどの福音書よりもはるかに多く使う言葉がこの喜びと感謝です。でも皆さん勘違いしないでください。喜びと感謝と言っても、パウロは普通私たちがイメージしているように、単にいつもにこにこして嬉しそうな顔をしていたということではないのです。

彼は誰よりも多くの試練と困難に直面しました。だからこそ、それを乗り越えたときその喜びを誰よりも感じたのですね。ですから彼が言う喜びは決して感情的な表情ではなく、生きる意味を感じ取った実感なのです。ですからどんなことにも感謝できたのですね。

「“霊”の火を消してはいけません」(5:19)とパウロは続けて言いましたが、この霊とは聖霊のことです。聖霊の一番大きな働きは私たちを前進させることです。

昔、坂本九という歌手が「明日がある」という歌で日本人を元気づけてくれました。「明日があるさ、明日がある、若い僕には夢がある、明日がある、明日がある、明日があるさ・・・」

「明日がある」これこそ私たちの信仰です。確かに過ぎた一日は決して帰ってこない。どんなに悔やんでも嘆いても戻らない。でも明日という日は永遠に私たちを訪れてくれるのです。

この地球始まって以来太陽が昇らなかった日は一度もありません。明日が訪れるということは、今日どんな失敗をしてもまたやり直すチャンスが与えられるということ、今日の傷は明日自らが癒してくれる、今日の涙は明日自らがぬぐってくれるということなのですね。ですから新しい日を迎えることは決して当たり前の平凡なことではなく、実は非常に大切な素晴らしいことなのですね。日の出とともに勇気を与えられる。喜びと感謝で新しい日を迎えましょう。

立ち止まるな、前進せよ、過去を悔やむな、これが聖霊の促しであって私たちの信仰です。

皆さん、昨日の人ではなく、いつも明日の人にならしましょう。

(赤波江神父)



待降節第4主日 12月20日

「私は主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように。」(ルカ 1:38)

マリアは大天使ガブリエルから聖霊によって救い主を身ごもったことを告げられたとき、まだ結婚していませんでした。当時結婚していない女性が妊娠していることが発覚すれば石殺しにあわなければならない、マリアの前には大変恐ろしい状況が待ち構えていました。

そのような状況の中で「私は主のはしためです。お言葉通り、この身になりますように。」と答え、神の導きを信じました。この聖書の言葉の原文の意味は、本当は嫌だけど神様から言われたから仕方なしに従います、という消極的なものではなく、神様がそう言われるのなら、ぜひ実現しますようにという積極的な応答なのですね。そしてこのマリアの応答は実は「アーメン」なのですね。

アーメンという言葉はヘブライ語で「そうです」「然り」「そうなりますように」という創造主に対する絶対的な信頼を表す言葉で、私たちが日々の祈りの中で、そしてミサの中で絶えず繰り返している言葉です。

マリアの応答は単に個人的な信仰ではなくヘブライの民を代表する信仰告白であり、実は私たちの人生の指針となる言葉なのですね。

私たちの人生もアーメンでなければならない。即ち、私たちはいつも人生をよしとして肯定しながら歩み続けなければならない。間違っても自分の人生を否定してはいけない。

確かに私たちの人生には大きな障害と困難がつきものですが、それを等身大で受け止め、そこに人生を生きる意味を見出して、それをステップとしてまた歩み続けなければならない。

私たちもマリアとともに救い主の降誕を待ち望みながら、いつも人生に対して「アーメン」と肯定し、自分の人生を信じながら歩んでいきましょう。

(赤波江神父)



《 私にとって今年のクリスマスが特別である理由 》

T.N.

今年も主のご降誕祭を迎えました。例年、待降節は救い主の誕生に思いをはせて、神様のお恵みに心が温かくなります。そして町の雰囲気のためか、少し心が浮き立つ思いで過ごしていました。クリスマスを迎えるこの時期にはヨハネによる福音書3章の後半部分を黙想の課題にします。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。・・・」から始まるイエス様の言葉は、私たちへ送られた良き便りです。

でも、今年に限っては新型コロナの感染拡大のため、そう浮かれた気分ではられません。罹患された方、失業して生活の手段を失った方、また懸命に患者の治療に従事されている方、そして、そういう方々のご家族の不安や苦しさに思いを寄せたいと思います。昨年までの平穏な日常、当たり前の平和な生活を取り戻すことは難しいと思いますし、誰もが、心を痛めている状況ですが、心の平和を取り戻す、或いは保つことができる筈です。

救い主の降誕の良き日に、私たち一人一人を愛して下さっている神様に感謝し、神様に信頼を置く者の祈りを顧みて下さると信じ、この新型コロナの感染の終息を願って、皆様と共に祈りたいと思います。

C.T.

私にとって初めてのクリスマスは佐用教会に行きはじめの頃。公教要理をデビエテル神父様から学んでいました。待降節も終わり頃、神父様からご降誕のお話の後聖劇をすることを聞き、私も誘って下さり嬉しかった。劇は真夜中に始まるとの事。私の家は遠く山奥でバス、列車も無く、自転車も夜は危険で諦めていたら、賄いのSさんが1階の奥に和室があり布団もあるからと親切にして下さり劇に参加。この夜は昼間の疲れで夢の中の出来事のように。あの場所は屋根裏だったのでしょくか？早朝ミサに与った後、小さなテーブルを囲んで「メリークリスマス」(1955年)！！

この出会いから何年過ぎたのでしょうか？クリスマスイブのミサは欠かさず与っています。コロナ禍で先も見えないまま、一変して幼稚園、教会学校もお手伝いの出番はなく、祈りつつのクリスマスの小さなプレゼント作りも完了。今だから出来る！と始めた本の整理は読みあさってばかり。待降節を迎え「イエス様に何をプレゼントできるかなあ」と思いここ数年、六甲教会で「子供と共に捧げるミサ」に参加。子供達との出会いの場としていましたが今年は無理でしょうね？

共同体の皆様と共によきご降誕を迎えられるよう祈っています。

A.S.

年末の12月25日、人類を救おうとして同じ人間になられた神の憐みと愛の素晴らしさを賛美するクリスマスは毎年いろいろな思いを私に抱かせます。今年は親しい身内に不幸があり、昨年の義父の死と共に、人生について考えさせられました。現在私も、2次のお勤めで、高校生の相手をしています。まさか現役の時に、しぶしぶ取らされた情報の免許を生かしてオンラインの授業することになるとは思いもしませんでした。クリスマスを迎えるにあたり、この1年何とか過ごせたことを神様に本当に感謝したいと思います。

H.S.

私が住んでいる岡本地区では、健康、友愛、奉仕をモットーに地域住民有志で小学校下校時の見守り、地域清掃等、又、甲南大学生と共に校内周辺の清掃や公園清掃等・・・地域貢献活動を行っています。コロナで活動が制限され困難になっている間も出来る範囲で感染に注意しながら皆さんと共に工夫して活動しています。

(1) 本山第2小、本山第1小学校の下校時の見守りを2～3人一組で週4回、早朝、小学生登校時の見守りを2～3人で月2回行っています。

(2) 清掃活動は長子公園、梅林公園の2ヶ所を近隣住民20人前後でほぼ1時間、甲南大学生と2か月に1回10人前後で1時間行っています。

平成10年に定年退職した後から今日まで継続して20数年楽しく続けています。地域の方々との交流は日常生活をしてゆく上でとても大切な事だと思っています。自分の時間を何かの為に喜んで出せる健康を戴いている事を主に感謝しています。いつも飛び回っていて家の事はお留守だと家人に文句言われながら、コロナに負けないで教会に来て皆さんと一緒に祈り、地域に多くの仲間が出来る事で孤独感が無くなり心の安らぎを得られると思います。健康である事に感謝して奉仕活動に専念します。

N.S.

昨年1年を過ごした香港では日本人カトリック会のお世話になりました。指導司祭のアダム神父様は信念と情熱、ユーモアに溢れた方で、ミサの後神父様を中心に囲む昼食のテーブルは賑やかな大家族のようでした。そして会食中神父様は毎回必ず「障害を持つ人、小さい人をどう助け育てるか、家族の力がいかに偉大か」を熱く語られるのでした。私はいつでもこの集いに戻れるつもりでいました。けれども今年4月24日、呼び戻されたメリノールニューヨーク本部で神父様はコロナウイルスに感染、他の司祭方とともにあっという間に天に召されました。もうあのお話は聞きたくても聞けない・・・。特にこのクリスマス、貧しい厩に眠る幼子イエスの姿にアダム神父様の熱い口調が耳に甦ります。

《 司祭からのメッセージ 》

今年4月、神戸中央教会、住吉教会ではエマニュエル神父のサバティカルにより、司祭の交代がありました。緊急事態宣言中であり、信徒の皆様へは赤波江神父ご着任をスムーズにお知らせできませんでしたので、ここにお2人の司祭から頂いたメッセージを掲載します。

-赤波江神父から-

6年ぶりに住吉教会に戻ってきました。よろしくお願いします。
教会の付近も少し様変わりしました。でも皆さんあまり変わってませんね。安心しました。
今年はコロナのせいで忘れられない年になるでしょう。コロナですべてが変わりました。いい意味でも、悪い意味でも。でもいい面だけを見ましょう。悪い面ばかり見ていたら、悪いものを自ずと引き寄せることになります。いい面だけをみていたら、必ずいいことが訪れます。お互い物事のいい面、人のいい面だけを見つめましょう。
幸せになりたければ、幸せを播きましょう。

-エマニュエル神父から-

当たり前のことだが、2020年がこんな一年になるとは思わなかった。司祭としての役割を考え直そうと思い、しばらく帰国する予定だったが、コロナ禍が起きて、すべての計画を延期するようになった。サバティカルに行かなかったが、コロナ禍が続くことによって、計画していたことを改めて考える時間が与えられた。それでゆっくりと、司祭としての役割を見直すことが少しできたと思う。それを少し分かち合いたいと思う。

司祭は信者のために務める人ではない。共同体の中にいて皆さんと同じようにイエス・キリストのよい知らせを信じる弟子、心の祈りと神の言葉に基づいて、神の国を信じる者でありたい。司祭としての活動はその土台の上に築くものだと感じる。教える者、何かをする者より、信仰の道を歩む者でありたい。皆さんは当たり前だと思うかもしれないが、忙しくしてしまうとそれを見失ってしまう。コロナ禍によってほとんどの教会の活動が中止になり、暇な時間が久しぶりにあった。その中で、祈りの人になるよう、招きを感じた。祈りとはイエスと座って、イエスの言葉、イエスの道について瞑想すること。そこから神の国にふさわしい、正しい思いと行動が咲く。これから皆さんと共にイエスを宿す存在でありたい。待降節はそういう存在になるように招く期間である。

《 住吉教会 2020 》

2020年はこの住吉教会だけではなく、すべてにおいて今までとは全く違った一年でした。「当たり前」がそうではなくなった中、住吉教会での2020年を振り返ってみました。

1月1日 神の母聖マリア

“マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて思い巡らしていた” ルカ 2.19
新年おめでとうございます。主がこの1年を通し、私達をお導き下さいますように。私達が自分に与えられた使命を心にとめ、日々大切に主に従って歩めますように。

1月12日（日） 成人の祝福と新年会

「主の洗礼」の主日のミサの中、1名の新成人が神父様から祝福を受けられました。神様の愛とご家族様の愛を受けられ、立派に成長された姿に、信徒一同大きな喜びを頂きました。参加出来なかった5人の新成人の方々からのメッセージも読み上げられ、それぞれの地で頑張っておられる若い人たちのために皆で祈りました。ミサ後、新成人と新年をお祝いする会が催され、晴れ着の新成人のお嬢さんを囲んで、華やかな会となりました。



1月17日（金） 阪神・淡路大震災追悼ミサ



6434人が犠牲となった大震災から25年、この大震災により亡くなられた方、ご家族を無くされた方、この震災のために困難の中にある方々のためにお祈りを捧げました。「災害の後の困難な生活の中で人間は弱くて何もできないと思うが、できることがある。それは互いに愛すること、そうすれば力が与えられる。」（エマニュエル神父のお説教より） ミサ後は茶話会をもちました。

2月2日（日） 聖パウロ三木のお祝い

住吉教会の守護聖人である聖パウロ三木の祝日、2月5日を前に、主日のミサのあと、日本26聖人殉教者へのお祈りを一同で捧げました。例年通り、担当地区の皆さんが準備して下さったおぜんざいを感謝の内に皆でいただき、パウロ三木ホールが和やかな雰囲気になりました。



2月9日（日） 新型コロナウイルスの終息に向けた祈り

2月11日の「世界病者の日」に先立ち、共同祈願では「病床にある人とその家族、医療や看護に携わるすべての人に聖霊を注いでください。希望に照らされ、新たな力で満たされますように。」続いて「感染が広がる新型コロナウイルスで発病されている方々の回復と医療現場で奮闘されている人々を励まして下さい。」とお祈りが捧げられました。

また、ミサの後、久しぶりにお元気なお姿で司式に加わられたペンケレシ神父を先頭に多数の信徒が病者の塗油の秘蹟に与りました。



2月26日（水） 灰の水曜日



新型コロナウイルスによる大きな影響で平常と異なる毎日過ごす私達は様々な思いを胸に灰の水曜日を迎えました。

「今日から始まる四旬節の間、隣人のことを思い、本当に必要な人に必要な助けを届けることができますように。」「四旬節の歩みを始める私たちが自分の生き方を見つめ直し節制に努め、新たな心で福音を聞き、主に従うことができますように。」

共同祈願より

2月28日、大阪教区から新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言にともなう措置として、2月29日から3月14日までの公開ミサの中止が発表されました。信徒は主日のミサに与る義務を免除され、各自が家庭で聖書を朗読し祈りを捧げ、ロザリオの祈りを唱える時を持つようにとの勧めがありました。

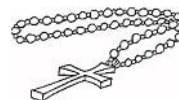
住吉教会ではこの日以降、ホームページとメールを用いて、司祭からの「黙想のヒント」の発信が始まりました。毎週届く「黙想のヒント」がどれほど私たちの信仰の助けになったことでしょう。

大阪教区ではその後も措置が延長され5月31日まで公開ミサの中止が続きました。「聖週間という一年でもっとも大切な日々に向かっていく時期にミサができないというのはとても悲しいことですが、この痛みを感じながら、多くの人々がおかれている苦しい状況を心に留めて、このときを過ごすようにいたしましょう。この災禍の一日も早い終息のために祈ります」

—大阪教区のメッセージから—

3月1日 四旬節第1主日 エマニュエル神父の黙想のヒント

本日の福音書の中、イエスは霊に導かれて、悪魔と戦います。イエスの答えを見るとひとつのことを思いました。悪魔は神の力を利己的に利用するようにイエスを誘惑する。イエスの答えを見るとイエスはいつも神様を優先することがわかります。私たちが父と呼ぶ神様は、私たちのしもべではない、私たちは神様のしもべです。信じる者になるのは天の父の望みを聞き入れることです。



3月8日 四旬節第2主日 エマニュエル神父の黙想のヒント

アブラハムについて： 私たちが神様を探し求めているのではない。神様こそ私たちに寄り添い、話しかけている。そしてアブラハムと同じように私たちにこう約束して下さい。「今までの自分、知識、財産、人間関係を捨て、これからわたしがあなたに示す道に従って行きなさい。わたしを聞き、信用すれば、必ずあなたを豊かにします」と。神様が約束して下さいからこそ、私たちは神様を探し求め始めることができます。信じることは知ることではない、命をかけてその約束に沿って生きるということだと感じます。その約束の内容はイエス様の変容の話からもう少し明らかにわかります。神様は豊かな輝かしい命を約束します。イエス様を通してその約束が明らかになりました。神様は私たちを命へ導いて下さる方です。何も恐れず、神様に従うものになれるように祈りたいと思います。

3月15日 四旬節第3主日 エマニュエル神父の黙想のヒント

辛い奴隷制の状態から解放された人たちは、きっと神様は力ある存在であり、すべての悪から守って下さると信じました。でも解放されてから砂漠の厳しい環境に置かれ、辛い経験を始めた。どうして神様は辛い経験から守らないのか？開放的な経験をしたのに、どうしていつも守って下さらないのかが理解できなかった。そして神様からすぐ離れて、前の辛い生活を懐かしく思い出した。神様は辛い経験から、病気や災害、死ぬことから守って下さらないのか？そうでしたら神様なんていらないでしょう。でも神様は違います。

辛い経験をさせない存在でしたら、主イエスは残酷な死に方を経験しなかったでしょう。でもイエスは辛い処刑、その痛み、そして死を経験しました。

イエスのメッセージは、「神様はあなたを楽にするよ」という安心させるメッセージではありません。イエスのメッセージは、「あなたの父を信じなさい、そして父と同じようになりなさい」というメッセージです。神様は上から世界を支配する存在ではない。息のように私たちを動かす存在です。つまりどんなことがあってもその息に沿って生きることができます。神を信じるとはその息に従って生きるということです。自分を守るためではない。その息に沿って生きる。その息の有様はイエスが示して下さいます。他人に仕えることです。他人のために自分を尽くすこと。そしてその息、神の霊にすべてを委ねること。私たちは神の息に沿って生きるものです。その息はまことの命へ導きます。生きることより神の息吹、聖霊、愛に従って生きる方が私たちの有様です。

東京教区では3月1日（日）から、インターネットでのミサの配信が始まり、中継のミサに与って霊的聖体拝領をすることが勧められました。大阪教区でも、3月22日には酒井補佐司教司式のミサ配信が行われました。

3月22日 四旬節第4主日 エマニュエル神父の黙想のヒント

イエスは盲人が信じる前にその盲人を癒しました。盲人はイエスと再会してから、イエスと会話した結果でイエスを信じるようになりました。信じることは信用の関係に入ることなのです。イエスを信じることによってイエスを信用する。カテキズムの内容を納得することではありません。この世に生きたイエスを相手として認め、そのことばを受け入れ、信用することです。その信用、信仰が命を変えます。盲人はイエスに癒されて目が見えるようになりましたが、その盲人にとってはきっと目が見えるようになるより、一番人生を変える出来事はイエスと信用の関係に入ったことだと思います。イエスから何かを頂くのではなく、イエスを素直に信用できるようになれるように神に願いましょう。

4月5日 受難の主日 エマニュエル神父の黙想のヒント

二回群衆が現われます。一回目はイエスを迎えに出て、イエスを歓迎します。二回目はイエスの死刑を求めます。群衆の一人として遠くからイエスを見るだけで済みますか？ それともイエスとともに歩むものになりますか？ 群衆はいろいろな名前があります。世間、教会、社会。群衆を選ぶか、イエスとの道を選ぶか？ イエスを信じることは、群衆よりイエスを選ぶことだと感じます。そうすればイエスがわたしの命の道になります。決してその道は簡単な道だと言えないですが、初めの一步から始まります。



4月9日 聖木曜日主の晩餐の夕べ エマニュエル神父の黙想のヒント

ペトロはイエスが弟子たちの足を洗うことに対して理解できず、抵抗した時、イエスは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えます。「キリスト教徒とは何か」と考える時、イエスとのかかわりがその基礎であることを受け入れなければなりません。キリスト者の道はキリスト教的な価値観やカテキズムに沿って生きるものではありません。キリスト者の道はイエスとのかかわることです。主イエスもかかわりを望んでいます。主イエスが話された言葉を信じ、日常生活の中でその言葉を生かすことによってそのかかわりを持つことになります。イエスの言葉を信じる人の中でイエスは生きておられます。イエスは神様の恵みによってかかわる人をいつくしみ、その人の命になるために遣わされました。柔和で謙遜であるイエス様を信用して、相手として受け入れれば、イエスは喜んであなたを平和と命へ導いてくださいます。

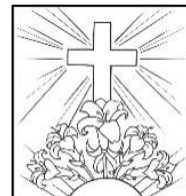


4月10日 聖金曜日主の受難 エマニュエル神父の黙想のヒント

ペトロは3回イエスの弟子であることを否認しました。それなのにペトロはまだイエスを愛していることを考えてもいいと感じます。ペトロは自分のために怖がって、その恐怖に誘導されてしまいました。そしてイエスを見捨ててしまいました。私はペトロを裁くことができますか？ 私こそペトロと同じように、毎日イエスを無視して我が道を

行ってしまうのではありませんか？ 隠れキリシタンでさえ同じことをしたのではありませんか？そう、危険な目に合うと、私はイエスに従うことができません。イエスに従うために、まずイエスを否認する自分が死ななければなりません。それは自分の意志でできないかもしれません。だから父である神様に願います。

イエスに従える恵みをお与えください！辛い時にイエスを見捨てるのではなく、辛い時、怖い時こそ主イエスは私の癒しと平和になってくださいます。



4月12日 復活の主日 エマニュエル神父のメッセージ

ご復活おめでとうございます。

復活徹夜祭と朝のミサの中で読まれた福音書は同じことを伝えています。イエスと呼ばれた人が死から蘇られたと。徹夜祭の福音書の中ではイエスご自身が二人の女性に現れ、復活されたことを言い、従って二人の女性は喜んで、目撃したことを他の弟子たちに伝えるに行きます。その一方、日中ミサの福音書の中でイエスは現れません。女性たちもペトロとイエスが愛された弟子も空いたお墓しか見つけられませんでした。どうして福音書があんなに違うのか？そして、本当に違うのか？徹夜祭の福音書は確実な出来事としてご復活を伝えようとしています。だからご復活されたイエスを目撃した女性の出来事を伝えています。「確かにこのことはあったよ」と。日中に読まれたヨハネの福音書も復活を伝えています。イエスを目撃していない人のためにご復活を語っています。つまり、復活されたイエスを見なくても信じることができると伝えたいのです。そしてイエスを見なくてもイエスのご復活を伝えることができる、と福音書は伝えると解釈してもいいと思います。ちなみに、ペトロと一緒にイエスのお墓を見に行った弟子は名前が伝えられていません。その弟子はすべての信者を表すのではないのでしょうか？

私たちはイエスを見たことがありませんが、でも信じることができます。その信仰は目撃した弟子たちのことばに基づいていますが、私たちの中に神の息吹が彼らのことばを確かめてくださいます。五感で感覚できるイエスの復活の証拠はありません。でもイエスのことばを信じ、それに新たにされることがそのしるしになっています。今でも、世界中に、イエスを信じて、神の国の証として生きる人はいるのです。

イエスを見ることはできませんが、イエスのことばとイエスへの信頼が人を変えます。この世はすべてではない、苦しみと死がいずれなくなり、神の国が完成される日が来るという希望は、イエスを見なくても、自分の中で宿ることができます。そして恐れずにイエスのことばに沿って生きる人は確かに新しい生き方を発見します。イエスがもたらしたその新しい生き方は、神の愛に基づいています。ご復活祭を通して神の愛が被造物を包まれることがわかります。イエスは人間になってその愛の有様を示してくださいました。その愛は無償、無条件の奉仕でした。騒いでいる世界の中でイエスに学び、イエスの柔和の力を受けましょう。私たちのすべてにおいて、イエスとともに、私たちの苦しんでいる兄弟姉妹を探し、寄り添い、命と慰めを与える神の道具として生きていきましょう。



目次

4月19日 復活節第2主日(神のいつくしみの主日) 赤波江神父の黙想のヒント

今日の福音は復活したイエスのトマスへの出現の話です。最初に復活したイエスが弟子たちに現れたとき、たまたまトマス一人だけその場に居合わせませんでした。それで他の弟子たちが「私たちは主を見た」と言ったとき、自分がいないときに限ってイエスは他の弟子たちに現れたと思ったのか、自分のはけ者にされたと思ったのか、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をそのわき腹に入れてみなければ、私は決して信じない」と言い張りました。トマスは頑固な性格でもあったのでしょうね。そのトマス一人のためにだけイエスはわざわざ現れてくださり「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。またあなたの手を伸ばし私のわき腹にいれなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」、と諭されました。



4月26日 復活節第3主日 赤波江神父の黙想のヒント

今日の福音は復活したイエスが二人の弟子に現れた話です。「この日、すなわち週の初めの日、二人の弟子が、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じあっていると、イエスご自身が近づいて、一緒に歩き始められた。しかし二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」皆さん変だとは思いませんか？どうして二人の弟子は一緒に歩いている人がイエスだと分からなかったのでしょうか？別れたのが10年以上も前なら理解できますよ。でもイエスが捕らえられ十字架につけられたのは、ほんの数日前の出来事です。しかも会話までしているのに？

イエスは宣教活動の間多くの奇跡を行い、人々は驚嘆しました。しかし最大の奇跡である復活は静かに、静かに行なわれました。今まで一緒にいた弟子でさえ気づかなかったくらいに。と言うのは、復活したイエスは日常生活の平凡さの中で現れてくださるからなのです。だから弟子たちも私たちもなかなか気づかないのです。私たちの生活はたいして同じことの繰り返しです。一見平凡で退屈に見える毎日の生活、このような毎日の中でこそ復活したイエスが共にいてくださることを信じましょう。そうして一見平凡に見える日々の奉仕、仕事のひとつ、ひとつに愛をこめて、復活したイエスが私たちの毎日の単純な生活を聖なる、実りあるものにしてくださるように。そして特に楽しいはずのこの大型連休中、新型コロナウイルス拡散防止のため、私たちは家にいることが求められています。一見平凡で退屈に見えるこの時こそ、復活したイエスが私たちの心の目を開き、今まで気づかなかった家庭での触れ合いの恵みを味わわせてくださるよう祈りましょう。

(ルカ 24:13-35)

5月3日 復活節第4主日 赤波江神父の黙想のヒント

今日の福音は善き牧者イエスの例え話です。以前私は友人と六甲山牧場に行きました。そこでは羊が放し飼いにされている所で、ヨーロッパの牧場の光景を彷彿とさせるのどかな牧場です。六甲山牧場は二つの丘にまたがって橋がかけられていて、羊や人が往来で

きるようにしています。ところで、私が橋を渡ろうとしたら橋のたもとに30匹くらいの羊が座っているのです。そのうちの何匹かは橋をじーっと見つめて、まるでいかにも「行こうか行くまいか、渡ろうか渡るまいか」というような表情をしているのです。私が友人に「この羊悩んでいるよ」と言って笑いながら橋を渡ろうとしました。すると一匹の羊がトコトコと私の後についてくるのです。それを見た他の羊もトコトコとついてくるのです。さらにそれを見た他の羊もあとをついてくるのです。しまいにはそこにいた30匹くらいの羊が全部一列になって私のあとにトコトコとついてくるではありませんか。まるで私は善き牧者キリストになったような何とも楽しい、いい気分になってしまいました・・・

「羊飼いは自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのについて行く」(ヨハネ 10:4)。でも同時に私は羊の性格が何となく分かりました。羊は飼い主がいないと生きていけない動物なのだと。

羊は弱い動物です。外敵と闘うことができず、おまけに逃げ足も遅い。狼に襲われたらひとたまりもない。単独で生きることはできず、群れとともに飼い主がいなければ生きていけない動物です。しかし羊は他の家畜に比べて羊毛、肉などの点で価値の高い動物です。イエスが私たち人間をこのような羊に例えているのは非常に当を得ています。

私たち人間も単独で生きることはできず、いつも社会という群れの中で生きています。おまけに非常に弱い。何に対して弱いかというと、罪と悪の誘惑に対して非常に弱い。魂の牧者であるイエスが私たちに代わって罪と悪に対して闘ってくださらなければ、私たちは全く無力です。羊が飼い主にとって価値の高い大切な家畜であるのと同じように、私たちひとり、ひとり例外なく神の前に非常に大切な宝なのです。

ところで、こんなに弱い羊ですが唯一最大の強みを持っています。それは聞き分ける耳です。「羊はその(飼い主)の声を聞き分ける・・・しかし、他の者には決してついて行かず、逃げ去る。他の者たちの声を知らないからである。」(ヨハネ 10:3-5) この点人間はもしかしたら羊よりも劣っているのかもしれないかもしれませんね。悪魔の声を神の声と勘違いしたり、神の声を聴き漏らしたり、聴こうとしなかったり。

何が正しいのか間違っているのか、何が恵みで何が罪か、羊のような聴き分ける耳を神に願い求めましょう。(ヨハネ 10:1-10)



5月10日 復活節第5主日 赤波江神父の黙想のヒント

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、私をも信じなさい。」今日のこの福音の冒頭の言葉は、まさに今の世界中の人々に向けられた言葉です。昔SFと言うのがありました。空想物語のことで宇宙戦争とか人造人間とかで、子供の頃小説や漫画で読まれた方も多いと思います。でも昔空想物語だった宇宙戦争も人造人間も現実のことになりつつあります。そのSFに透明人間の話もありました。透明人間が人類を攻撃する話ですが、今世界に蔓延している新型コロナウイルスのことを思うと、何か透明人間から人類が攻撃されているような錯覚に陥りそうです。何と言ってもウイルスは目に見えない。撃退しようにもどこにいるのか分からない。そして、しまいには「あそこに行ったら感染する」「あの人感染しているのでは？」などとお互い不信感に包まれてしまいそう

です。お互いの不信感とデマ、いつの時代でもこれが悪の力の宣伝効果なのです。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、私をも信じなさい。」というイエスの言葉は今こそ新型コロナウイルスに怯える私たちに力強く響いてきます。私たちの敵であるウイルスは目に見えない。でも私たちの味方である神も、祈りの力も目に見えない。目に見えない神の力を信じることによって、この目に見えない悪の力に打ち勝ちましょう。今こそ「神を信じよ」「神の愛を信じよ」「神の導きを信じよ」という単純かつ荘厳な声が世界に響き渡っています。更に私たちは感染から身を守ることだけではなく、この病気で苦しむ人の癒しと回復を毎日祈ることによって彼らと心をひとつにしてこの悪の力を乗り越えましょう。私は医師から回復の見込みはないと診断された人が、自らの生命力を信じ、祈りの力によって回復した例を何度も見てきました。それは本人の祈りだけではなく、また周りの人の祈りの支えもあったのです。

祈りには地球の引力のような力があります。引力は目に見えないし感じられない。でも厳然として私たちを支えている。祈りの力も目に見えない。でも厳然として私たちを支え、導いている。

「祈りは神の引力なり」この言葉をしっかりと心に刻みましょう。（ヨハネ 14：1－12）

5月17日 復活節第6主日 赤波江神父の黙想ヒント

「あなた方の抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」（使徒ペトロの手紙 1 ペトロ 3：15－18）

ある人が以前六甲山をハイキングしていました。するとあるグループとすれ違いましたが、その様子が皆仲良さそうで何とも幸せそうな人たちに見えたのです。思わずその人は「皆さんどちらから来られたのですか？」と尋ねたところ、「私たち住吉教会から来ました」と嬉しそうに答えられて教会に誘われ、それをきっかけに住吉教会に通って洗礼を受けられたそうです。

皆さん福音宣教って何も難しくないですよ。六甲山をハイキングしていた住吉教会の人たちは何も宣教するつもりはなかった、ただ仲良く歩いていただけなのですが、その雰囲気は他の人たちから見たら何か特別な希望に満ちているように思えたのです。皆さん今日のペトロの言葉「あなた方の抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」この弁明とは何でしょうか？それは即ち、「信仰をもっていてよかった」という以外にはないと思います。

ある住吉教会の子供がある日母親に「世の中の人、みんな教会の人たちのようだったらいいのになあ」と話したそうです。その子供に「将来住吉教会はどんな教会だったらいいですか？」と尋ねたところ「毎週パーティーがあったらいい！」と答えてくれました。

皆さん、コロナが収束したら毎週パーティーしましょうね！



5月24日 主の昇天 赤波江神父の黙想のヒント

今日の第一朗読、使徒たちの宣教の言葉「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは

天を見つめていた」この情景を想像してみましょう。弟子たちはどんな表情だったのでしょうか？どんな目で天を見上げていたのでしょうか？イエスが離れ去っていくので寂しかったのでしょうか？私は決して寂しい思いで天を見つめていたのではなかったと思います。それではどんな表情だったのでしょうか。

私は司祭として多くの人の死に接してきましたが、時々亡くなる前に静かな敬虔な、そして美しい表情を見せてくれた人たちがいました。そのような人たちの美しい表情のなかに天国と言われる永遠の生命の一端を見るのです。

私事になりますが、主の昇天の主日になるとよく亡くなった父親のことを思い出します。父は私が司祭叙階を受ける前の年に癌で亡くなりました。その時私は助祭で入院している病院の父に毎日ご聖体を授けに行っていました。亡くなる前日、即ち最後にご聖体を授けた後、父は何か気持ちよさそうな、感慨深げな遠くを見るような目で私に「今天国のことを考えているんだ」と言って、おいしそうにタバコを吸っていました。（病室でタバコを吸うなんて今では考えられないことですが、当時はのんきな時代でお医者さんも末期の癌患者だということが多めに見ていたのでしょうかね）その翌日父は生涯を終えました。最後にご聖体を受けた後父は天国を約束されたのです。何と幸せな人でしょうか。

「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた」このときの弟子たちの表情は、もしかしたら私の父が亡くなる前ご聖体を受けたときのような表情だったのかもしれないと想像しています。



5月31日 聖霊降臨の祝日 公開ミサが再開されました



4月から着任された赤波江豊神父とペンケレシ神父の司式で、復活節を締めくくる聖霊降臨の祝日のミサがあげられました。

緊急事態宣言の解除後、初のミサということで「ソーシャルディスタンス・マスク着用・聖歌は歌わない・AB地区CD地区の2部制・換気の徹底」ほ



か、十分に対策をたてた上での再開でした。

8月15日 聖母の被昇天

今年の聖母被昇天のミサは、コロナ対策で密集を避けるために、午前9時半と午後7時の二回にわたって行われました。例年のように、ミサ後に親交を深めることもなく、「すみよし」被昇天号の発行もない祭日ではありましたが、ミサに与れる静かな喜びに満ちておりました。

説教の中で、赤波江神父は、「私たちは神を信じるとともに、未来も信じる者であるように、『しんこう』は『信仰』であり『進行』である」、と話されました。コロナ蔓延で閉塞感の漂う中、マリア様のように神様を信じ未来を信じる大切さに思い巡らしました。



8月23日 前田枢機卿司牧訪問

主日の11時のミサに前田万葉大司教がサプライズでお越しになり、赤波江神父とともに司式なさいました。厳しい暑さの中、わざわざ住吉にお運び下さり、このコロナ禍の収束を信徒の皆とともに祈り下さいました。

ペトロがイエスから天国の鍵を授けられた、
という今日の福音から

「秋の声 何と答える 私たち」

「天の鍵 天地つなぐや 天の川」

と恒例の俳句を二句お詠みになりました。



感染予防のため、歓迎の催しもできませんでしたが、ミサ後限られた時間の中で、大司教と親しくお話の機会を持つことができ、心安らぐひと時となりました。



11月15日 七五三の祝福

9時30分の主日のミサの中で3人のお子さん（男子2名女子1名）がエマニュエル神父から七五三の祝福を頂きました。

「大人になっても神さまの子供として神さまと信頼関係を持ち、お願いばかりではなく信頼して神と共にこの世を歩み、人に神の恵みを伝えられる人になるように・・・。」 神父のお説教から。

ご家族と教会のみんなの喜びと感謝が捧げられたミサでした。



共同祈願

「七五三の祝福を頂いたこの子供たちがいつもキリストの愛と光の中を歩いていくことができますように。」



《 各チーム活動報告 》

社会活動チーム

Y.K.



1. 炊き出し 毎月第1土曜日
(自肅期間中は神戸中央教会の社会活動センターでお弁当を作り提供)
2. フィリピンレイテ島台風被災支援募金
3. もとやま園のクッキー販売 (自肅期間中を除く)
4. 使用済みの切手、書き損じハガキ、インクカートリッジをシャプラニールに送る
5. 難民移動移住者支援 シナピス工房のグッズ販売
「難民申請したにもかかわらず入管(出入国在留管理局)に収容されたり、労働力として受け入れていたのに手続き不備等のため不法滞在とされ入管収容される方、日本生まれで日本語しか分からない子供に親の母国に帰れと強要された方、長年収監され続け突然在留資格なしで仮放免された方等々。働いてはいけなさとされながら様々な制約の下で日々の生活が危ぶまれる方が大勢いらっしゃいます。カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピスでは難民移住者と支援者が共に心を込めて作品を作って生活支援に役立てています。

財務チーム

O.K.

今年の一年を振り返り、財務チームのメンバーも内容も変わらず健全な作業でスタートいたしました。しかし、コロナウイルス感染拡大によりミサが行われなくなり活動も中断となりました。

そんな渦中でも教会に祈りを捧げ維持献金を届けてくださる信徒様がおられ頭が下がる思いでした。一方で特別献金日変更など大阪大司教区からの連絡を見落とせないことに少し神経をつかいましたが大阪大司教区の指導を仰ぎながら、間違いなく活動が進められ安堵している次第です。これからも信徒の皆様からのお預かりしております献金は「将来への平和と希望の糧」と思いつつ活動してゆきたいと思います。
また、この活動に携われる御恵みをいただいていること、主に感謝しております。

目次

施設管理チーム

T.T.

昨年から今年にかけて、教会内の雨漏りや、電気設備、空調設備、エレベーター等の不具合な点を直してきました。来年は、屋根からの水漏れ防止処置が有効で、それ以上水が浸入してこないと分かったので聖堂前の廊下の汚れた天井板を新しく取り替えます。また、ルルドの排水管が狭くて詰まっているため、皆様の意見を聞いたうえで、配管を少し大きめの管と取り換えることも検討します。その他不具合があれば何でもご連絡いただけると幸いです。

養成チーム

Y.N.

新型コロナウイルスは、教会にも私達の生き方にも大きな影響を及ぼしました。教会活動が中止されている中、例年開催されていた養成コースの講演会も養成チームの例会も行われていません。

この情勢の中下記の教皇様の言葉を心にとめ歩みたいと思います。

「嵐（コロナ禍）は私たちの弱さをあらわにし、うわべだけの偽りの信念を暴きます。その信念のもとに、私たちは自分の予定、計画、習慣、優先事項を決めています。自分たちの命と共同体を育み、支え、強めてくれるものを忘れ、あらゆる考え、人々の心を豊かにするものを私達は忘れていきます。主はこの試練の時を選びの時とするよう求めておられます。裁きの時ではなく、私たちの判断の時です。何が重要で何が一過性であるかを識別し、必要なものとそうでないものを見分ける時です。

これから待ち受けている生活に向き合い、私達を必要としている人々に目を向け、自分達の内にある恵みを強め、認め、暗くなっていく灯心を消さないように、希望の灯を再び灯しましょう。」

住吉教会では、来春の初聖体に向けて年明けからお勉強が始まります。希望の光である2人のためにお祈り下さい。

典礼チーム

A.K.

2020年の典礼を振り返ってみますと、穏やかな陽気の中、元旦ミサは大勢の方が来られ、例年通り臨時の聖体奉仕者はいませんでした、必要であったほど賑やかな幕開けとなりました。

典礼における主な行事としては、[1/12]成人のお祝いミサを始めとし、[2/2]聖パウロ三木お祝いミサ（その日から古い枝の回収を開始）[2/9]病者の塗油（2/11 世界病者の日に因み希望者にコーナン神父様に塗油して頂きました）[2/25]灰の水曜日（19 時からの灰の式には寒い中 50 名ほど列席）などがありました。

その後、新型コロナウイルス感染症が拡大し[2/29 土]以降公開ミサが中止となりました。受難の主日[4/5]の枝を準備しないといけなかった時期、今年も教会の蘇鉄の枝を営繕チームの方々に切って頂くようお願いしましたが、切ることもなくその日のミサも出来ませんでした。情勢が日に日に変化の中エマニュエル神父様とご相談して、聖週間（聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭）全部細かく検討し短縮した方法で予定していましたが、それも又二転三転し典礼で最も大切な聖週間[4/9/～4/11]・ご復活祭[4/12]までも公開ミサ無しとなりました。

個人的には、ミサが無かった期間 Youtube の配信ミサに与り、知らない聖歌を聞くことができ、住吉の聖歌隊でも今度練習したいと思う曲も見つかりました。

4 月赤波江神父様が再びご着任され、そしてようやく聖霊降臨の主日[5/31]より公開ミサが再開いたしました。でも、3 密（密集・密接・密閉）を防ぐ為に評議会で話し合い、主日のミサを地区別で 2 回に分散し、パーテーションも窓も開けて、出来るだけの予防対策をとりながら行うようになりました。ミサ中の聖歌は当初オルガン奏楽だけで、歌唱無しでしたが 8 月から答唱詩編・アレルヤ唱は独唱者だけが歌えることになりました。

被昇天祭ミサ[8/15]・敬老のお祝いミサ[9/20]・セニョール・デ・ロス・ミラグロス[10/18]・追悼祭ミサ[11/1]・七五三のお祝いミサ[11/15]など、少し今までとは違いましたが、それでもミサが出来ました。蘇鉄の枝も大きく立派に育ってきて、来年の枝の主日に必要な本数の心配もしないですむくらいになっています。

まだコロナ禍の今、また今年も待降節[11/29～]を迎えていつも通り聖堂に待降節の 4 本立てロウソク台とプレゼピオ（馬小屋）を準備し、外のルルド横にもプレゼピオとクリスマスツリーを飾りました。そしていつも通り主のご降誕祭[12/24. 12/25]を喜んで一緒に、希望を持ってお祝い致しましょう！

【今しばらくミサ中は、マスクをして心の中で歌って下さい！！】

♪ 主は きませり～ 主はきませり～



メリークリスマス！

目次

広報チーム

A.S.

2020年に入り、コロナウイルスのために多くの日常が非日常となりました。私たち広報チームもそろそろ「すみよし」イースター号の準備に入ろうとした矢先のことでした。

神父様方のご着任などもなんとか教会の皆様にお知らせしたい気持ちでいっぱいながら、何もできなかったことは残念でした。

このたび、2019年クリスマス号以来1年ぶりに「すみよし」クリスマス号を皆様にお届けできることは私たちチームメンバーにとってこの上ない喜びでした。皆様を楽しみにしていただけるような「すみよし」をこれからもお届けできるよう、また住吉教会の広報活動を通して教会のいろいろなことを発信できるよう皆様のご協力を頂きながらチームで力を合わせて活動いたしてまいります。

宣教司牧チーム

Y.K.



「私たちもトマスのように、信仰の弱さの故に神を信じなかったとしても、教会を信じなかったとしても、教会の仲間から離れないようにしましょう。一時的に神や教会から離れたとしても、教会の仲間とつながってさえいれば、いつか必ずイエスの方から現れてくださり、再び信仰の喜びを与えてくださいます。皆さん教会の仲間から離れたらいけませんよ。」

4月19日復活第主日の赤波江神父様からの黙想のヒント

上のお言葉、おぼえていらっしゃるでしょうか。毎日曜日に集まってご聖体をいただき、御復活を祝ってみんなで談笑するのが当たり前だったのに、それを削がれた日々 ～ この神父様の言葉は心にしみましたね。この毎週の“黙想のヒント”届いてない方ありませんか。教会共同体からの情報は、メール（携帯、スマホ、パソコン）、ホームページ、電話、ファックス、そしてハガキで、なるべくすべての方へ届くように努めています。

宣教司牧チームは、神父様の訪問や秘跡の授与等ご希望の方への取り次ぎなど、共同体の交わりが深まるようなお手伝いを心がけています。完全にはいきませんが、どうぞご相談ください。各地区の世話係、その他数名、評議員の皆さんに申し出てください。

営繕チーム

T.Y.



営繕チームでは教会の建物、放送設備や照明器具などの設備の運営と維持管理を行っています。他には教会の建物や敷地内外の清掃をしたり備品などの管理もしています。

聖堂などのお掃除の活動では、参加して下さる方々のメンバーが近年固定化する傾向にあり、平均年齢（？）の上昇が悩みの種です。それでもこれまでは何とか頑張って来ましたが、このコロナ禍による活動のし辛さもあり、週に二回のお掃除の機会を一回にまとめることになりました。それでもお掃除する場所が減る訳ではありませんので新たにご参加下さる方をお一人でも多くお待ちしております。

建物の外でも樹木の剪定や除草などがあります。状況を見ながら必要に応じてメンバーが集まり大小の植木ばさみ、脚立、鋸など色々な道具を使って手入れ等の環境整備に当たっています。最近では南と東のフェンス内やルルド周りの樹木の枝払いや雑草抜きを行い、幼稚園のマリア様の像の後ろの花壇のツツジの枝などを整え、危険な状態にある5本の枯れ木を根っこから撤去する等の作業を行いました。



教会学校チーム

M.U.



今年はコロナの影響で教会学校を開始することができず、前年度の卒業式を今年度6月21日に行うなど・・・いつもと異なる一年でした。けれど、その中でも「何かできること」を模索して夏には暑中見舞い、秋にはロザリオの月なので祈りのカードを、クリスマス🎄にむかっては待降節やクリスマスプレゼントの準備などを通し、神様との繋がりを忘れないように・・・と奮闘しています。

クリスマスの劇を当たり前のように行なってきた私たちも改めて「目には見えないけれど大切なもの」を考えつつ、こどもたちと会える日を楽しみに過ごしています。

青年学生チーム

A.S.

私たち青年学生チームは例年、食事会やキャンプなどの活動を行っていました。しかしながら今年度はコロナウイルスの感染拡大によりそれらの活動ができない状況でした。キャンプやクリスマスパーティーなどが開催できなかったことは、非常に残念でしたが、来年は新しいメンバーも含め、更に親交を深めながら楽しく活動していきたいと思っています。

来年こそは若い力で教会を盛り上げていきたいと思うので、どうぞよろしくお願い致します。



ホームページ委員会

『ホームページこの一年』

S.K

2020年は神の母聖マリア、成人の祝福に始まり、2月26日の灰の水曜日まで例年通りニュースを掲載して参りました。2月29日から公開ミサ中止になり四旬節第一主日から小教区の皆さまにホームページとして何か出来ないかと考え、エマニュエル神父様に説教の要旨を書いていただけないかとお願いしました。説教というよりは黙想のヒント、神の言葉を味わうヒントを書きましようとして引き受けていただきました。その後赤波江神父様に引き継がれ、毎週土曜日にホームページに掲載、連絡網でも発信を続けています。

住吉教会には多くの国の方が来られますので日本語のほか、英語、スペイン語でも毎月の予定表を掲載しています。予定の変更は出来るだけ最新のものを反映するように努めています。今年のセニョール・デ・ロス・ミラグロス（奇跡の年）はミサだけの静かなものでしたがニュースはスペイン語、英語でも掲載しました。

祈りのページには主の祈り、アヴェ・マリアの祈り、ロザリオの祈りなど多くの祈りを載せています。最新のマリアの連願も載せております。お祈りください。

ミサに来られなかった方や司祭の言葉を聞きなおしたい方のためにミサ録音 CD を準備しています。教皇フランシスコの毎週の「お告げの祈り」、「一般謁見」を日本語字幕付き DVD にしてあります。いずれもパウロ三木ホールに置いてありますのでご利用ください。

《図書紹介》

新型コロナウイルスにより経験したことがない毎日を過ごしている私達です。遠い昔のように思いますが、去年の秋は教皇フランシスコの日本ご訪問でとても幸せなシーズンだったことを記憶しています。昨年の「すみよし」クリスマス号の図書紹介では2冊紹介していますが、1年ぶりの今号でもまた教皇さまのご本の紹介です。

「パンデミック後の選択」

著者 教皇フランシスコ

発行 カトリック中央協議会

注（パンデミック 感染症の世界的大流行）

本書には今年3月27日から4月22日にかけて語られた、あるいは記された八つの重要な文書が収録されており、教皇の人類に向けた深いメッセージが書かれています。難しい文章ではないのでお勧めします。

あとがきから

「本書はバチカン出版局より刊行された
“Life After the Pandemic”の全訳です。

原題を直訳すれば

“パンデミック後の生き方(あるいは生活、人生)”

パンデミック後の社会がただ単にパンデミック前に戻るのではなく、弱い人、貧しい人にいっそう寄り添う新たな世界の構築を選別できるよう教皇の発するメッセージがカトリック教会にとどまらず、一人でも多くの人に届けられることを願ってやみません。」



(編集部)

目次

《 教 会 日 誌 》

1 月	1 日	(水)	新年ミサ (神の母聖マリア・世界平和の日)
	12 日	(日)	新成人の祝福・ミサ後、新年会をかねて新成人お祝い会
	17 日	(金)	阪神淡路大震災追悼ミサ
2 月	2 日	(日)	聖パウロ三木お祝い会
	9 日	(日)	新型コロナウイルスの終息に向けて祈りを捧げました
	26 日	(水)	灰の水曜日
	29 日	(土)	緊急事態宣言により公開ミサの中止が発表されました
4 月	5 日	(日)	受難の主日 (枝の主日)
	9 日	(木)	聖木曜日 (主の晩餐)
	10 日	(金)	聖金曜日 (主の受難)
	11 日	(土)	聖土曜日 (復活徹夜祭)
	12 日	(日)	復活の主日
5 月	31 日	(日)	聖霊降臨の祝日・公開ミサが再開されました
8 月	6-15 日	(木-土)	日本カトリック平和旬間
	15 日	(土)	聖母の被昇天
	23 日	(日)	前田枢機卿司牧訪問
10 月	18 日	(日)	セニョール・デ・ロス・ミラグロス
11 月	15 日	(日)	七五三の祝福
12 月	24 日	(木)	主の降誕 夜半のミサ
	25 日	(金)	主の降誕 日中のミサ

お知らせ

ペンケレシ神父様は9月1日に開所したサービス付き高齢者向け住宅
ドムスガラシア (園田教会隣) に入居なさいました



目次

《編 集 後 記》

不思議

こころが美しくなるとそこいらが明るくかるげになってくる
どんな不思議がうまれてもおどろかないとおもえてくる
はやく不思議がうまれればいいなあとおもえてくる

八木重吉

我が家の小さな十字架の後ろに額装された優しい書体のこの詩が置いてあります。心嬉しい時も心折れそうな時もいつも目に留めています。心配性の私は些細な事に心を碎かれ大らかなほっこりとした心を忘れがちになるからです。今年はコロナで毎日流される数字とニュース映像は、人々を不安にし普通の生活を奪いました。自粛と言われ教会にも行けなかった日々に日本中の信徒が同じ主日ミサに与れるように毎週ライブミサが配信されたのは本当に嬉しい事でした。今は住吉では密集を避けるために2度に分けての主日ミサが行われ毎週土曜日には黙想のヒントがメールで配信されています。お世話下さる方々に感謝しながらみんな元気ではやく普通のくらしがうまれればいいなあと祈っています。

K.T.

クリスマス おめでとうございます。

新型コロナウイルスのために私達は今までの考え方を変えなければならない毎日を過ごしています。25年前の阪神・淡路大震災で私達は大きな重い体験をしました。視野に入る光景は無残でも教会に来ればみんなで励まし合い一緒にミサに与り、前を見て過ごすことができました。目に見えないウイルスは私達が集まって力を出す機会を持たせてくれません。

一年ぶりに発行することができた今号はチームが集まって仕事をしたのでは密になるので違うやり方を考え、今まで以上に徹底してWEBを使つての校正、編集、印刷になりました。

経験したことがないことばかりのこの一年をふり返り神父様方、評議会の皆様への感謝と共にこの試練が今後に生かされますようにと御降誕のイエス様に信頼して祈ります。

M.H.



「すみよし」第209号

発行日	2020年12月24日
発行責任者	赤波江神父 コンサルタ神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380
http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp	

教会案内



【ミサ】

日曜日	9:30	11:00
月・火・土曜日		7:00
第1・第3土曜日	(スペイン語)	19:00

【講座】 信仰の分かち合い・聖書の分かち合い・Come & See

【教会学校】 対象:小学校1年生～6年生

新型コロナウイルス感染防止の為、上記
信仰講座・教会学校は当面開催されません。

【社会活動】

野宿者支援の炊き出し・神戸入港の外国船乗組員支援ほか

* ミサ・講座とも時間、曜日に変更がある場合があります

* 詳細はカトリック住吉教会へお問合せ下さい

TEL 078-851-2756 FAX 078-842-3380

<http://sumiyoshi.catholic.ne.jp>